

# 文法とプロトタイプ

## —特に受動態のプロトタイプ構造を中心に—

広島大学大学院 山 川 健 一

### 1 はじめに

本論の目的は、人間の概念カテゴリーの構成要素は等しくそのカテゴリーに属しているのではなく、認知されやすい典型的な要素を中心に構成されているというプロトタイプ理論の主張が、言語の文法構造にもあてはまることを示すことである。この一例として、英語の受動態を中心に理論的に検証し、英語の受動態のプロトタイプ構造を明らかにしようとするものである。大きな研究の枠組みは、ある文法項目の指導においてどのような例文を用い、どのように提示するとその文法項目の中心概念が学習者に最も明白に理解され、以後、その文法項目の学習（カテゴリー形成）が進んでいくのか、という問題に答えるものである。本論をこの大きな枠組みの中の一つとしてとらえ、プロトタイプ理論が文法項目の学習にどのような示唆を与えることができるのか、ということ以下検討する。

### 2 プロトタイプ理論

#### 2.1. 古典的理論とプロトタイプ理論の比較

プロトタイプ理論は概念のカテゴリー構造という心理学的な分野から展開されてきた理論である。この分野における古典的理論とプロトタイプ理論との比較を、「鳥」というカテゴリーを例にとり、以下、表にまとめてみる（Bates & MacWhinney 1982; Taylor 1989 に基づいて作成）。

	古典的理論	プロトタイプ理論
カテゴリーの構成員の決定	・カテゴリー内の構成員はすべて必要十分な特性 (feature) の集合の有無で決定される。(例:「羽がある」等)	・カテゴリーの中心となる典型例 (プロトタイプ) との特性の類似度によって構成員が決定される。(例:「鳥」の典型例の「こまどり」との比較)
構成員の典型性	・あるカテゴリー内のすべての構成員は、等しい資格でそのカテゴリーに属する。(例:「こまどり」も「だちょう」も等しく「鳥」というカテゴリーの構成員となる)	・同じカテゴリー内にもプロトタイプに近い、より典型的な構成員とそうでないものがある。(例:「だちょう」や「ペンギン」は、「こまどり」に比べ「鳥」の非典型的構成員となる)

他のカテゴリーとの境界	・カテゴリーは互いに明白な境界線を持つ。(例:「鳥」と「哺乳類」は明白に異なるカテゴリーとなる)	・カテゴリーの周辺部になるほど、他のカテゴリーとの境界が曖昧になってくる。(例:「こうもり」は生物学的には「哺乳類」だが「鳥」に近いものとして認知される)
特性の特徴	・特性は二元的(binary)である。(例:「鳥」の構成員は「羽がある」、「羽がない」の二元的な特性で決定される)	・特性は必ずしも二元的である必要はなく、プロトタイプの特性と類似度によって、カテゴリーの構成員は決定される。

## 2.2. プロトタイプ構造の一例

Rosch はアメリカ人を被験者にして実験したところ、'furniture' というカテゴリーにおいては、chair > desk > cabinet > piano > refrigerator > fan という順に、同様に、'vegetable' というカテゴリーにおいては、pea > corn > tomato > potato > pumpkin > rice という順になるほど非典型的な構成員と判断された、と報告している(1975: 229-30)。すなわち、この結果はカテゴリー内におけるプロトタイプ構造の存在を支持しているといえる。

## 2.3. 言語におけるプロトタイプ構造

### 2.3.1. 認知と言語

以上見てきたように、人間の概念カテゴリーの構成要素はカテゴリー内で均質ではなく、認知されやすいものと周辺的なものがあることがわかった。言語もまた人間の認知に基づいていて、言語事象をカテゴリー化することによって人間は言語を習得していく、という立場をとれば、プロトタイプ構造は言語においても存在し、プロトタイプ理論は言語習得(学習)理論において強い説明力を持つことになる(cf. Croft 1990)。

### 2.3.2. 他動性構造のプロトタイプ(Taylor 1989: 206-14)

言語においてもプロトタイプ構造は反映されている、ということの一例としてここでは他動性構造について見ていく<sup>1</sup>。以下の例文(1)~(15)はいずれも SVO という形式(カテゴリー)は共通しているが、(15)の文に近づくほど他動性は感じにくくなる。よって、(1)~(3)は他動性構造のプロトタイプのものといえる。

- |                                |                               |
|--------------------------------|-------------------------------|
| (1) The child kicked the ball. | (9) He swam the Channel.      |
| (2) John moved the table.      | (10) He carpeted the room.    |
| (3) Mary killed the intruder.  | (11) He wined the guests.     |
| (4) Elephants uproot trees.    | (12) Give me!                 |
| (5) We approached the city.    | (13) This hotel forbids dogs. |
| (6) I carried the suitcase.    | (14) The key opened the door. |
| (7) Mary helped John.          | (15) The room seats 500.      |
| (8) John obeyed Mary.          |                               |

### 2.3.3. 他動性を決定するパラミタ (Hopper and Thompson 1980; Taylor 1989 を参考)

上の例文で見た他動性の典型性は、次の9個のパラミタ (あるいは特性といってもよい) の集合で決定されると考えられる。それらは、(1) 二人 (つ) の参加者 (物) (participants)、(2) 動詞の動作性、(3) 動詞の表す動作の瞬時性、(4) 完了相、(5) 主語の意図性、(6) 肯定文、(7) 直説法、(8) 目的語が何らかの直接的影響を受ける、(9) 参加者 (物) の個別性、であり、これらのパラミタを満たす数が少なくなればなるほど、その文の他動性は低くなると考えられる<sup>2</sup>。

## 3 受動態のプロトタイプ構造

以上、言語におけるプロトタイプ構造の存在について例証してみた。受動態も同様に be + V-ed という構造を持ち、「受け身」の意味を持つ一つのカテゴリーとみなせる。このカテゴリーの中にもプロトタイプ構造は反映されているであろうか。田中 (1990) はプロトタイプの決定に際し、誤解を避け共通の認識が得られるよう、「理論的プロトタイプ」と「心理的プロトタイプ」を区別して考察するよう示唆しており、以下これに従って議論を進めていく。

### 3.1. 受動態の理論的プロトタイプ

理論的プロトタイプは言語学的基準に基づいて決定される。本論では、「頻度」、「機能」、「形態」、「規則性」という点から以下順に検討していく<sup>3</sup>。

#### 3.1.1. 頻度<sup>4</sup>

##### (1) 全般的傾向

- (a) active と passive の割合 - 書き言葉における能動態と受動態の比率を見ると、受動態は全体の 4~18%であった (Givón 1979)。
- (b) copula の種類 - 受動態内部の繋合詞は 'be' がほとんどで、全体の 94%を占めた (Svartvik 1966)。
- (c) agentful と agentless の割合 - agentless (動作主を表さないもの) が多数を占め、全体の 70~94% (Jespersen 1924) であるという報告や、80%以上 (Svartvik 1966; Givón 1979; Quirk et al. 1985) という報告もある。

##### (2) agentful (動作主を表すもの) の場合の by 以下にくる項の特徴

- (a) given information と new information の割合 - by 以下が new information (談話内で新情報を担うもの) は全体の 75%であった (Givón 1979)。
- (b) definite と indefinite の割合 - by 以下が indefinite (談話内でどれか限定できないもの) は全体の 90%であった (Givón 1979)。

#### 3.1.2. 機能 (Jespersen 1924; Quirk et al. 1985; Thompson and Martinet 1986)

次に受動態の機能であるが、受動態は以下の(1)~(5)のような場合において用いられる。

- (1) 動作主が明らか・無関係・冗長で必要ないとき
- (2) 動作主が不明・同定しにくいとき
- (3) 心理的な理由で動作主を表現するのを避けるとき<sup>5</sup>
- (4) 受動態の主語に大きな関心があるとき
- (5) 前後の文脈から受動態で表現し主語を統一する必要があるとき

このうち(1)~(3)は動作主 (by 以下) を表現せず、(4)~(5)は動作主を表現する場合であることがわかる。よって、3.1.1.の(1)で見た頻度と合わせて考えると、受動態の主な機能は動作主を

表現しない (agent defocusing) ことであるといえる (cf. Shibatani 1985)。そして副次的なもう一つの機能として、旧情報—新情報という談話の流れを保持すること、ということがいえる (cf. 3.1.1.(2))。

### 3.1.3. 形態

上の 3.1.1. から受動態の典型的な形態は be + V-ed (by-) であるといえる。動作主はふつう表現されていない。

### 3.1.4. 規則性

ここでは対応する能動態を持つかという観点から考察する。Quirk et al. (1985: 167) は次の(1)~(8)の例文を挙げ、同じ be + V-ed という構造の中にも、受動態らしいものとそうでないものがあることを指摘している<sup>6</sup>。(1)、(2)は対応する能動態を想定するのが容易であり動詞性 (verbalness) が高いが、(7)~(8)などは主に状態を表しており形容詞性 (adjectivalness) が高く、対応する能動態を想定するのが困難であるといえる (cf. Granger 1983)。3.1.1. で見た頻度と 3.1.2. で見た機能を考慮に入れると、(4) のような動作主を表さないもの (つまり対応する能動態を普通持たないもの) が受動態の典型的なものといえよう (Quirk et al. 1985: 168)<sup>7</sup>。

- (1) This violin was made by my father.
- (2) This conclusion is hardly justified by the results.
- (3) Coal has been replaced by oil.
- (4) This difficulty can be avoided in several ways.
- (5) We are encouraged to go on with the project.
- (6) Leonard was interested in linguistics.
- (7) The building is already demolished.
- (8) The modern world is getting ['becoming'] more highly industrialized and mechanized.

## 3.2. 受動態の心理的プロトタイプ

心理的プロトタイプは心理学的基準に基づいて決定される。ここでは、「知覚的顕著さ」・「記憶のしやすさ」といった言語習得的観点から考察を試みる<sup>8</sup>。1970年代以降、心理学の分野で受動態に関する実験研究が盛んになり、どのような場合に受動態は学習されるか、ということが明らかになってきた。以下の(1)~(4)の要因を持つ受動態の文は先に学習され、次に、そうでないものの学習に広がっていった。

- (1) 受動態の主語が生物 (animate) であるもの (Wilson 1979; Dewart 1979; de Villiers 1980<sup>9</sup>) —これは、被動作主である受動態の主語が生物のときの方が、非生物のときよりも、その動作の影響を受けているのが明確に認知されるからである。
- (2) 動詞の動作性の強いもの (Sinclair et al. 1971; Maratsos et al. 1979; de Villiers 1980; Maratsos et al. 1985; Sudhalter and Braine 1985) —感情や状態を表す動詞 (experiential/mental verb) よりも動作を表す動詞 (actional verb) の方が、明確に受動態の主語に影響を与えると認知されるからである。
- (3) 被動作主 (patient) — 動作主 (agent)<sup>10</sup> という順の意味的關係の表層構造を持つもの (Sinclair et al. 1971; Pinker et al. 1987) —これは by 以下が表されている場合に

限られるが、受動態の主語と by 以下にくるものがそれぞれ patient と agent という意味的關係になっていて、この間に「力」の移動（他動性といってもよい）が見られる場合である。上の(1)、(2)と同様に受動態の主語が動作の影響を受ける度合いの明確さが、ここでも関係しているといえる。

- (4) 受動態の主語が先行文脈で談話の焦点、または、先行文脈の文が受動態でその主語になっているもの (Tannenbaum and Williams 1968; Olson 1972; Dewart 1979; Weiner and Labov 1983) - これは前述の 3.1.2. の(5)と関係してくる。つまり談話内においては主語が同一であるほうが、聞き手（読み手）は心的処理をしやすと考えられるからである。

### 3.3. 受動態のプロトタイプ

以上の点から次のようなものが受動態のプロトタイプの的なものであるということが出来る。

・理論的プロトタイプ<sup>11</sup>

形態 be + V-ed (by-)

機能 (1) agent defocusing (2) 旧情報-新情報構造の保持

・心理的プロトタイプ

patient - agent という意味役割の構造を持ち、両方が生物 (animate) で agent から patient へ動作が明白に伝わるもの。焦点は patient にある。

## 4 日本語の受動態<sup>12</sup>

以上、英語の受動態を理論的プロトタイプ・心理的プロトタイプという観点から考察した。理論的にはこれらのプロトタイプに近い例文を用いて受動態を学習者に導入し、徐々に非典型的なものを教えていけば学習が容易になる、ということになる。しかし、日本人学習者の場合、すでに日本語を習得しており日本語の受動態の影響も考慮に入れる必要がある。次の例文(1)、(2) (下村 1987: 9)、(3) (Watabe et al. 1991: 125)、は日本人学習者に書かれたものであるが、日本語の受動態の影響を受けていると考えられる。

(1) \*Mr. Shinkai is taught by us. (新海先生は私たちに教えられています。)

(2) \*My sister seemed to be tired, because she was walked by me.  
(・・・妹は私に歩かされたから。)

(3) \*My mother is died last year. (昨年、母に死なれた。)

(1)は日本語の「尊敬」、(2)は「使役」、(3)は「間接受身」の影響をそれぞれ受け、英語の受動態の学習に転移していると考えられる。以下、日本語の受動態について述べ、英語の受動態との違いを明らかにする。

### 4.1. 日本語の受動態の分類<sup>13</sup> (寺村 1982; 久野 1983; 村木 1989)

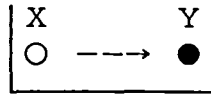
#### 4.1.1. 直接受身

主格に立つ名詞が述語動詞の表す動作の直接的影響を受けるもので、英語の受動態に類似している。次の例文(1)、(2)の「太郎」、「祖母」はそれぞれ図1のYとXにあたる。

(1) 太郎は祖母に育てられた。

(2) 太郎は祖母に助けられた。

「YがXに～サレル」  
(寺村 1982: 247)



—図1— Δ視点

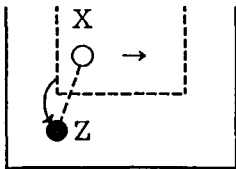
#### 4.1.2. 間接受身<sup>14</sup>

間接受身は主格に立つ名詞の受ける影響が間接的で、対応する能動態を持たない。次の例文(1)は自動詞の場合で、「私」と「雨」はそれぞれ図2のZとXにあたる。例文(2)は他動詞の場合で「私」、「隣人」、「ピアノ」はそれぞれ図3のZ、X、Yにあたる。

- (1) 私は雨に降られた。  
(2) 私は隣人にピアノを弾かれた。

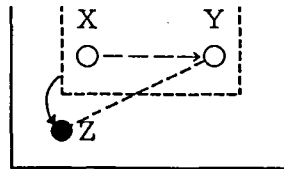
「ZがXに(Yヲ)～サレル」(寺村 1982: 247)

・自動詞の場合



Δ視点 —図2—

・他動詞の場合



Δ視点 —図3—

#### 4.2. 日本語と英語の受動態

金水(1992: 18)の用語を用いるのなら、英語は「他動性優位」の言語で、日本語は「視点優位」の言語といえるであろう。3.1.で見たように英語の受動態はある状況において、他動性が感じられながら、何らかの理由で動作主を表現しない場合に典型的に用いられた。そのような場合以外では能動態を普通用いるのである。なぜなら英語の他動詞構文は守備範囲が広く、ある種の因果関係や包摂関係が存在すれば、容易に他動詞構文が作れるからである(金水1992: 17)。一方、日本語の場合は基本的には他動性が基準となっているのだが、その方向性に対する制約がゆるく、視点が置かれている対象への「影響」を表す目的においても受動態は用いられるといえる。

#### 5 受動態指導への示唆

以上の議論から、英語の受動態指導への三つの示唆を述べる。まず、文レベルの場合であるが、例文提示の際(場面・状況を併用して提示する場合も含む)、受動態の心理的プロトタイプに留意し、「力の移動」を明確に表している受動文から用いるようにする(cf. 3.2.)。次は指導順序<sup>15</sup>に関する示唆である。ここでの主張は、3.1.で見た受動態の頻度、機能を考慮し、受動態をbyを用いないものから導入して、第二文型の類似形として認識させる、ということである。具体的にはまず、第二文型(SVC: V = be)に習熟させた後で、過去分詞を形容詞的用法(p.p. + 名詞/名詞 + p.p.)という形で導入し、次に、受動態をS + be + p.p.という形でまず習熟させる。それから、談話内における情報構造を意識させつつ(cf. 3.1.)、by以下のある受動態を導入する。もちろん、これらの導入においては心理的プロトタイプの特性に注意して例文を選ぶようにする。これにより、「たすきがけ」を使わなくとも受動態を

導入でき、受動態本来の機能に沿った指導に一步近づくことができるであろう。最後は日本語からの転移についてである。日本語の間接受身からの影響を防ぐには、英語の第三文型<sup>16</sup>を事前に十分に指導し、「力」の動き（他動性）を意識させ、学習者が誤文を生成したときのみ、対応する能動態との関係を指摘したりするようにする。また、日本語において受動態と同じ形態素を持つ可能態・自発態・使役態からの影響を防ぐには、日本語の「れる」、「られる」は必ずしも受動態を意味するとは限らないことを意識化させる必要がある。

#### 註

1. 言語におけるプロトタイプ効果はここで扱う他動性構造のみならず、多くの方面での研究がある。例えば、田中（1987; 1990）は基本動詞の意味の分析に、そして Coleman and Kay（1981）は動詞 'lie' の意味分析にプロトタイプ理論を用いている。その他、'be easy to V' 構造（Yamaoka 1988）、英語の主語（Bates and MacWhinney 1982）、日本語の主語（柴谷 1985）等の分析にもプロトタイプ理論は応用されている。なお、この理論を扱った包括的な研究書として Lakoff（1987）、Taylor（1989）、論文集として Tsohatzidis（1990）がある。

2. 例えば以下の9組の例文で、(a)の方が(b)より、それぞれのパラミタ(1)~(9)において他動性が高い文といえる。(2),(4),(5),(9)の英文は Hopper and Thompson 1980: 252-3; (7)は Siewierska 1984: 16)

- (1) a. John hit Bob.  
b. John cried.
- (2) a. I hugged Sally.  
b. I like Sally.
- (3) a. John kicked Bob.  
b. John carried Bob.
- (4) a. I ate it up.  
b. I am eating it.
- (5) a. I wrote your name.  
b. I forgot your name.
- (6) a. I smoke marijuana.  
b. I don't smoke marijuana any more.
- (7) a. I answered the question.  
b. If only I had answered the question.
- (8) a. John broke the vase.  
b. John watched the vase.
- (9) a. I drank up the milk.  
b. I drank some of the milk.

なお、Rice（1987: 426）は Hopper and Thompson の統語・形態論的なパラミタのみでは不十分で、説明できない場合があると述べている。例えば、次の例文(10)、(12)においては(10)の方が、これらのパラミタでは他動性が高いと考えられるが、それぞれを受動化してみると、(12)の方が適切文(13)となる。よって Rice は、これらのパラミタに加え、文全体を言語使用者がどのようにとらえ「力」の動きを感じているか、という視点も考慮する必要があると主張している。

- (10) Mary exercises in the living room.
- (11) \*The living room is exercised in by Mary.
- (12) That flea-bitten dog has slept in this bed again.
- (13) This bed has been slept in again by that flea-bitten dog.

3. 田中(1990: 102)は理論的プロトタイプを決定する言語学的基準として、「具体性」、「基本性」、「頻度」、「規則性」を挙げているが、「具体性」については次の3.2.で考察することになるのでここでは省略した。「基本性」については、ここでは「機能」と「形態」という二つの観点から考察した。

4. もちろんここで引用された頻度に関する研究は、サンプルの量や種類において大きく異なる。しかし、結果的には、一般的傾向を大きく逸脱したものではないであろう。

5. つまり話し手(書き手)は、動作主を表現する義務から意識的に又は修辭的に回避することができる。この点における聞き手(読み手)との駆け引きについては Stanley (1975) を参照。

6. Quirk (1985: 167-71) は(1)~(4)の文を「中心的な受動態」(central passives)と呼び、(4)の文を最も普通のタイプとみなしている。(3)の文は対応する能動態の動作主が曖昧である(a, b)。(5)、(6)の文は「半受動態」(semi-passives)と呼ばれ、'very' や 'rather' で修飾できたり、他の繋合詞(copula)(例えば feel や seem)も使えることから、形容詞性が高くなっているといえる(c)。(7)、(8)の文は「擬似受動態」(pseudo-passives)と呼ばれ、動作の(結果的)状態を表し、形容詞性が非常に高くなっている。これに対応する能動態は(d)のようなものである。

(a) Oil has replaced coal.

(b) (People in many countries) have replaced coal by oil.

(c) Leonard seemed very interested in and keen on linguistics.

(d) (Someone) has already demolished the building.

7. 2.1.で述べたプロトタイプ理論の特徴である「カテゴリーの周辺部になるほど、他のカテゴリーとの境界が曖昧になる」がここでも顕著になってくる。つまり、例文(8)のようなものからますます形容詞性を高くしていくと、通常の SVC (V = be) のようなもの(例えば The game was exciting. She is beautiful. など)に移行して形容詞のカテゴリーに入っていくと考えられる。

8. 田中(1990: 101)は心理的プロトタイプを決定する心理学的基準として、(1)「頻度」、(2)「社会・文化的重要性」、(3)「知覚的顕著さ」、(4)「記憶のしやすさ」、(5)「親密度」を挙げているが、受動態の場合、語の意味論とは異なり、(2)、(5)は考察の基準に適さず、また(1)もすでに3.1.1.で考察したので、ここでは(3)と(4)を言語習得的観点から考察の基準とした。

9. ここで用いた de Villiers (1980) の研究は、Adamson (1989) に引用されていたものを用いた。

10. 心理的プロトタイプを決定する特性となる「動作主」(agent) もさらに、「生物性」(animacy)、「意志・意図」(intention)、「原因」(cause)、「人間」(human) 等の下位特性によって、プロトタイプ構造を形成していると考えられる。

11. 受動態の導入段階でしばしば利用される変形規則(たすきがけ)は、機械的で、受動態の概念や機能を理解するのに適さない、という指摘はかなりある(例えば、静 1986、下村 1987、嶋原 1988、四方 1990、金谷 1992)。by 以下のない受動態の頻度や受動態の本来の機能を考えると、受動態は能動態の単なる書き換えと見なされるべきではない。

12. 寺村は日本語の態を「補語の格と相互関係にある述語の形態の体系」(1982: 208)と定義してある。これによると、態は文法的な態(受動態、可能態、自発態、使役態)と語彙的な態に分けられる。ここでは考察の対象を受動態のみにしぼることにする。なお、本章で前章と同様、日本語の受動態のプロトタイプ構造を示すべきであるが、これは今後の研究課題とし、



ここでは日本語の受動態の特徴を述べるにとどめておく。

13. 日本語の受動態の分類には様々な用語が用いられる。ここで用いた「直接受身」、「間接受身」は主語の影響のされ方から分類したものである。その他、それぞれを「中立受身」、「被害受身」(久野 1983)、「非人称主語の受身」、「人称主語の受身」(水谷 1985)と呼ぶ分類もある。また、主語が有性か無性かによって「有情の受身」、「非情の受身」という呼び方もある。「間接受身」の別の呼び方で「めいわくの受身」も広く浸透している。

14. 間接受身は日本語独特の受身であると感じられるが、英語にも類似した表現がないわけではない。前置詞の 'on' を用いたり(例文1)、「経験受動態」(passive of experience) (have + 目的語 + 過去分詞)を用いたりして「被害」の意味を多少表すことができる(例文2、3)。しかし、(2)、(3)はそれぞれ(4)、(5)のように表すのが自然であり、また好まれるようである(水谷 1985: 120-8)。

- (1) I was rained on.
- (2) I had the letter read by my mother.
- (3) I had all my whisky drunk up by my friend.
- (4) My mother read the letter.
- (5) My friend drank up all my whisky.

15. Adamson (1989; 1990) は、プロトタイプ理論に基づいてシラバスを作成し、易しいものから難しいものへ学習が進むように項目を配列する必要があると主張している。また、四方 (1990) は現在完了と経験受動態の構文と通常の受動態をどのような順序で指導するか、という問題に対して一つの提案を試みている。なお、「過去分詞」という一つのカテゴリーを想定するならば、受動態と完了形は同じカテゴリーに属する。よって、受動態と完了形の共通性について新しい見解が持てるかもしれない。これは今後別の機会に論じることにする。

16. これは基本的には SV0 という形態を持つものであるが、「自動詞 + 前置詞」の形態で他動性が感じられるものも含めることにする。ここで重要なのは SV0 という構造ではなく、「力の移動」(他動性)という概念的なものの理解である。例えば、次の例文(1)、(2)は同じ 'went into' を所有するが、(1)のみが受動化を受け入れる (3) (Quirk et al. 1985: 163)。

- (1) The engineers went very carefully into the problem.
- (2) The engineers went very carefully into the tunnel.
- (3) The problem was very carefully gone into by the engineers.
- (4) ?\*The tunnel was very carefully gone into by the engineers.

#### 参考文献

- Adamson, H.D. 1989. Variable rules as prototype schemas. In. S. Gass, C. Madden, D. Preston & L. Selinker. eds. *Variation in Second Language Acquisition. vol. 2. Psycholinguistic Issues*. Multilingual Matters Ltd.
- Adamson, H.D. 1990. Prototype shemas, variation theory, and the structural syllabus. *IRAL*, 28: 1-25.
- Bates, E. & B. MacWhinney. 1982. Functionalist approaches to grammar. In. E. Wanner & L.R. Gleitman. eds. *Language Acquisition: The State of the Art*. Cambridge University Press.
- Coleman, L. & P. Kay. 1981. Prototype semantics: the English verb *Lie*. *Language*, 57:

26-44.

- Croft, W. 1990. *Typology and Universals*. Cambridge University Press.
- de Villiers, J. 1980. The process of rule learning in child speech: A new look. In K. Nelson. ed. *Children's Language*. vol.2. Gardner Press.
- Dewart, M.H. 1979. The role of animate and inanimate nouns in determining sentence voice. *British Journal of Psychology*, 70: 135-41.
- Givón, T. 1979. *On Understanding Grammar*. Academic Press.
- Granger, S. 1983. *The Be + Past Participle Construction in Spoken English with Special Emphasis on the Passive*. Elsevier Science Publishers.
- Hopper & Thompson. 1980. Transitivity in grammar and discourse. *Language*, 56: 251-99.
- Jespersen, O. 1924. *The Philosophy of Grammar*. Allen & Unwin.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. The University of Chicago Press.
- Maratsos, M., S.A. Kuczaj II, D.E.C. Fox & M.A. Chalkley. 1979. Some empirical studies in the acquisition of transformational relations: passives, negatives, and the past tense. In W.A. Collins. ed. *Children's Language and Communication*. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Maratsos, M., D.E.C. Fox, J.A. Becker & M.A. Chalkley. 1985. Semantic restrictions on children's passives. *Cognition*, 19: 167-91.
- Olson, D.R. & N. Filby. 1972. On the comprehension of active and passive sentences. *Cognitive Psychology*, 3: 361-81.
- Pinker, S., D.S. Lebeaux & L.A. Frost. 1987. Productivity and constraints in the acquisition of the passive. *Cognition*, 26: 195-267.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Rice, S. 1987. Towards a transitive prototype: evidence from some atypical English passive. *Berkeley Linguistics Society*, 13: 422-34.
- Rosch, E. 1975. Cognitive representations of semantic categories. *Journal of Experimental Psychology: General*. 104: 192-233.
- Shibatani, M. 1985. Passive and related constructions: a prototype analysis. *Language*, 61: 821-48.
- Siewierska, A. 1984. *The Passive: A Comparative Linguistic Analysis*. Croom Helm.
- Sinclair, A., H. Sinclair & O.D. Marcellus. 1971. Young children's comprehension and production of passive sentences. *Archives de Psychologie*, 41: 1-22.
- Stanley, J.P. 1975. Passive motivation. *Foundations of Language*, 13: 25-39.
- Sudhalter, V. & M.D.S. Braine. 1985. How does comprehension of passives develop?: A comparison of actional and experiential verbs. *Journal of Child Language*. 12: 455-70.
- Svartvik, J. 1966. *On Voice in the English Verb*. Mouton & Co.
- Tannenbaum, P.H. & F. Williams. 1968. Generation of active and passive sentences as a function of subject or object focus. *Journal of Verbal Learning and Verbal*

- Behavior*, 7: 246-50.
- Taylor, J.R. 1989. *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Clarendon Press.
- Thompson, A.J. & A.V. Martinet. 1986. *A Practical English Grammar*, 1960, 2nd edn. Oxford University Press.
- Tsohatzidis, S.L. ed. 1990. *Meanings and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*. Routledge.
- Watabe, M., C. Brown & Y. Ueta. 1991. Transfer of discourse function: passives in the writings of ESL and JSL learners. *IRAL*, 29: 115-34.
- Weiner, E.J. & W. Labov. 1983. Constraints on the agentless passive. *Journal of Linguistics*, 19: 29-58.
- Wilson, S.J. 1979. Factors influencing the frequency of switches of voice during the recall of active and passive sentences. *The Journal of General Psychology*, 100: 277-85.
- Yamaoka, T. 1988. A semantic and prototype discussion of the 'be easy to V' structure: a possible explanation of its acquisition process. *Applied Linguistics*, 9: 385-401.

- 金谷憲 編著. 1992. 『学習文法論』. 河源社.
- 金水敏. 1992. 「場面と視点—受身文を中心に—」. 『日本語学』. 8月号.
- 久野 暉. 1983. 『新日本文法研究』. 大修館.
- 嶋原敦子. 1988. 「文型・文法事項等導入再検討4 受動態」. 『英語教育』. 7月号.
- 静哲人. 1986. 「文法用語再検討4 受動態」. 『英語教育』. 7月号.
- 柴谷方良. 1985. 「主語プロトタイプ論」. 『日本語学』. 10月号.
- 四方雅之. 1990. 「文型・文法事項等指導順序再検討3 過去分詞」. 『英語教育』. 6月号.
- 下村勇一郎. 1987. 「コミュニケーションに役立つ受動態の指導」. 『現代英語教育』. 1月号.
- 田中茂範. 1987. 『基本動詞の意味論 コアとプロトタイプ』. 三友社出版.
- 田中茂範. 1990. 『認知意味論 英語動詞の多義の構造』. 三友社出版.
- 寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味』. くろしお出版.
- 水谷信子. 1985. 『日英比較 話し言葉の文法』. くろしお出版.
- 村木新次郎. 1989. 「ヴォイス」. 北原保雄 編. 『講座日本語と日本語教育4 日本語の文法・文体(上)』.